

お悩み相談室

先生
のための

第6回 [保護者面談の秘訣が知りたい!]

学校用品の準備から基本的な生活習慣の指導まで、家庭との上手な情報の連携や協力体制を作っていくのに、保護者との面談は重要です。しかし、全ての家庭と段取りよく面談するのは難しいものです。

保護者会のあとに、「個人的にご相談が……。」という場面や、学校側から個別に面談の機会を特設するときなど、どんなことに気をつければよいでしょうか。「この先生なら信頼できる!」と思われる面談の秘訣があれば教えてください。



面談週間など、一定の期間に学級の全家庭と面談を行うには、その段取りがとても大切です。



まず、基本手順を確認しましょう!

面談日時決定の基本手順

面談実施日の時間 割り振り枠をつくる。

- A 学校側からあらかじめ候補日を記入した表を配り、不都合な家庭を調整する。
- B 第3希望まで、希望日・時間を表に記入して提出してもらい調整する。

面談実施日時の決定版を配付して、予定を確保する。

- A 担任が予定を決めてしまうので、不都合な家庭のみの調整で済む。家庭訪問の場合は、訪問先が近いまとまりで予定を立てられる。
- B 家庭の希望に応じることが基本なので、働きに出ている家庭が多い地域では有効。

● 面談日程の枠の例

(学校での面談の場合)

	3日(月)	4日(火)	6日(木)	7日(金)	10日(月)
13:40~	有村	石川		上村	岡田
14:00~	加藤	片瀬	勝又	北島	木村
14:20~		工藤	古坂	小西	斎藤
14:40~	坂森		島崎	清水	
15:00~	瀬川	相馬		立川	津森
15:20~	寺田	戸田	永田		新井田
15:40~	浜川	古田	保谷	山崎	山下
16:00~					渡辺

*一人当たりの時間は、学級の人数と設定された日数との関係で決めます。

個人面談をスムーズに!

ここがポイント!

- ポイント** 年度初めの時期に行う面談は、信頼関係作りの第一歩です。とにかく顔を合わせ、好印象をもってもらえるようにしたいものです。
- ポイント** あらかじめ、面談の内容の要点を家庭に伝えておき、限られた時間で学校と家庭のそれぞれの場での様子を交流し合えるようにします。
- ポイント** 面談時間は20分程度が理想と言われています。長くなると、保護者の集中力も続きません。

話したいことがたくさんある家庭は、その日の最後にすると次の面談を気にせずに話せます。また、面談順の途中を空けておくと、ひと息入れながら次の準備もできます。



Q2 “主体的・協働的な活動” って、どういうこと？

主体的・協働的な活動と
そうでない活動の違いは？

■主体的・協働的でない活動

児童の興味・関心に関係なく、教師が課題・めあて、そして解決の方法までを与えて活動が進む授業。つまり、児童が「何のために」「何について」「どのように」という意識をもたずに受け身で進める活動。こうした活動では、友だちとの「協働」の必要性が生まれない。



■主体的・協働的な活動

児童が「何のために」「何について」という課題意識を自らもち、「どのように」という解決の方法も意識して行う活動。学級内でも課題意識が共有されているので、「協働」の必要感が高まり、自ずと学び合いの必然性が生まれ、その質も高くなる。



主体的・協働的な活動の
実践のポイントは？

●問題解決の学習過程を重視する。

- ① 問題（課題）を見いだす
- ② それを解決するための見通しを立てる
- ③ 見通しを検証しながら自力解決する
- ④ 自分の考えを友だちと交流する
- ⑤ 学級全体で②～④を通して明らかになったことを整理し、まとめる

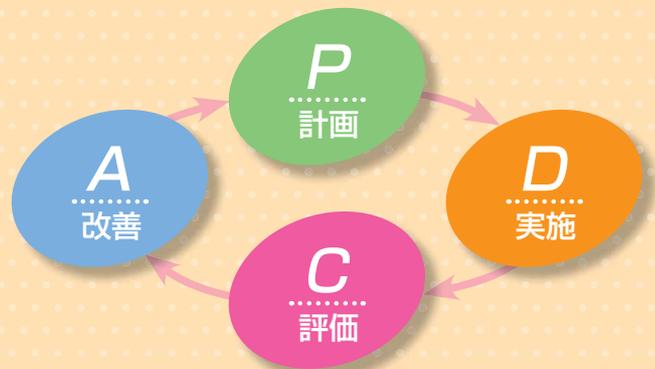
まず、授業をこのような流れに構成することが協働的な学習の前提です。

●一斉の学習形態に終始する授業を変える。

- ▶ 上記①の問題を見いだす場面でも、「何が問題となるか」、例えば隣の友だちと「なぜ」と思うことを意見交流する。
 - ▶ ②の場面で、解決方法について、小集団で比較・検討する。
 - ▶ ③自力解決の途中で、情報を交流する。
 - ▶ ④共通点や相違点、その根拠などの視点を明確にして、3人組や4人組で考えを説明し合い、よりよいものに整理する。
- など、問題解決の学習過程の各段階で、意図的に協働する活動を取り入れていく。

Q3 “カリキュラムマネジメント” って、どういうこと？

学校教育目標の実現に向けて、児童や地域、教師などの実態を踏まえて、教育課程（カリキュラム）を編成・実行・評価して改善を進める、いわゆるPDCAサイクルを意図的・計画的に、そして組織的に進めていくこと。また、そのために必要な人、もの、予算、情報、時間などの条件整備をすることです。その基盤には、教育目標の実現という共通の目標に向かって、教職員一人ひとりのよさを発揮しながら組織的に職務を行う課題意識が共有されていなければなりません。



- ◎学年経営・学級経営や教科経営を、学校経営・教育課程とつなぐ。
- ◎一人ひとりの教職員をつなぎ、「協働」の関係性を作る。



アクティブ・ラーニングを重視した教育活動を実践化するには、カリキュラム全体の構造に目を向けていかなければならないということですね！